

## 徳富蘇峰の生涯と政治思想

田 畑 忍

蘇峰徳富猪一郎<sup>(1)</sup>は、その政治思想が「横井小楠から発足し、新島先生の基督教の感化を受けたものであって、マンチェスタースクールの論争が予に感化したるは、恰も水乳投合したる趣があった」〔蘇峰自伝「一八一ページ」〕と自ら言っている。しかし、このような思想傾向は、その初期の著作である『新日本之青年』（明治十八年の著）『第十九世紀日本の青年及其教育』を明治二十二年に改題して出版したるもの〕と『将来之日本』（一八八六年・明治十九年、当年二十五才）においてとくに顕著であつて、コペン・ブライト及びブライスの引用が多く見出される。

彼が、同志社を退学（一八八〇年・明治十三年）して東京に遊学した後に熊本で、「大江義塾」を主宰（明治十四年—十九年）し、小新聞を刊行し、自由民権の政社相愛社にも関係したる当時に傾倒したのは、新島襄に紹介されて知った民権運動の英雄・板垣退助であつた。かくして田口卯吉・中江兆民・馬場辰猪等を知るようにもなり、殊に馬場辰猪にもらつたモルレー著の『コブデン伝』によつて同志社時代にラーネッド教授から教えられたマンチェスター・スクールの学説に更に親しみをもつようになった。すなわち蘇峰の自由民権論は、主として新島襄と同志社<sup>(2)</sup>において学んだもので、その造語である「平民主義」も東洋の平民と称していた新島の口癖に拠るものと思われるのである。彼のみでなく、浮田和民・安部磯雄・山崎為

徳・大西祝・海老名弾正等もまた、自由主義の思想を同志社で学んだことは言うまでもない。もつとも蘇峰自身、少年時代に間接的にはあるが、父・一敬の師事した横井小楠の進歩的な開国平和の思想<sup>(3)</sup>にすでに接し、塾の師・兼坂止水の平民的な人格にもまた教えられて、泰西的自由主義思想を受け容れる素地を夙につくっていた事実を看過できないであろう。

かくて蘇峰は一八七二年(明治五年)発足の「東京日日新聞」の主筆であった福地桜痴の才気ある文章に魅力を感じ、また幕末から明治にかけて『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』等を著わし一八八二年(明治十五年)以降「時事新報」を経営して論陣を張っていた福沢諭吉の暢達な文章と思想に瞠目しつゝ、しかも前者の国権主義に賛同せず、後者の官民調和論にも不満であった。例えば福沢の「姑息の妥協論」に対して出合い頭に反論を加えたことなども不思議ではない(「蘇峰自伝」一八八ページ参照)。蘇峰を福沢の継承者と見る考え(家永三郎「福沢精神の歴史的発展」「福沢と民友社との思想的関聯」参照)の誤りであることは従って明瞭と言えよう。それだけでなく、蘇峰は自由党一部(板垣退助・大井憲太郎等々)の武断主義にも反撥した。彼自身も、「明治六年征韓論の余波は、尚ほ当時の人心を支配し、民権論者の中でも半以上は、朝鮮討つべし杯と云う論が多かった。謂はば民権論者の中に於て、その多数は寧ろ一種の変形なる帝国主義者、若くは武力主義者であった。予は民権論者ではあったが、武力主義者には飽迄反対した。当時予は民権の敵は武力であると考え、戦争は武人跋扈の原因をなすものと考えたから、何処迄も戦争には反対した」(「蘇峰自伝」一五四―一五五ページ参照)と言っている。また、改進黨の「因循姑息」さにもなじめない彼は、漢籍で培い新島の自由主義に学んだ知性を、マコーレーやトクヴィールによって鍛え、また「ネーション」と「ライブラリー・マガジン」で健筆を振るっていたブライス・ダイシー・ゴドウィン・ギヤリソン等に共鳴していたのである。そののみならず、一種の反骨精神をもって多分に攘夷的などころがあり、新島流の皇室中心主義の思想も当初からもっていた。従って、その思想には多彩な複雑さがあった。しかもその政治思想の核心はナショナルリズムで、彼自身も「予は分類すれば、先づナショナルリストであらう」(同、六九八ページ)、と言っている。その平和

論に『日本国防論』（明治二十一年）の伴っていたことによっても、これを知ることができよう。

彼の文筆活動は一八七八・九年（明治十一・二年）の頃にすでに始まっていた。すなわち新聞雑誌への投書に始って、一八八二年（明治十五年）に『明治二十三年後の政治家の資格を論ず』を自費出版し、一八八四年には同じく『自由、道徳及儒教主義』を著わして知人に頒布し、更に一八八五年（明治十八年）に『第十九世紀日本の青年及其教育』を同じく自費で出版して論壇にデヴィユウした。それは田口卯吉の「東京経済雑誌」等にも連載されて、いわゆる出世作となった。

この成功に乗じて颯爽として著わした一冊が初期の主著たる『将来之日本』（一八八六年・明治十九年）である。「これには予の当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽さんと企てたばかりでなく、その覚悟を始め、又たその覚悟で終ったものである。予は当時専らスペンサーの進化説や、ミルの功利説や、抑々又たコブデン、ブライト等のマンチュスター派の非干渉主義や、自由放任主義や、若くは横井小楠の世界平和思想や、それ等のものに依って、予一個の見識を打ち建てたるものであった。」（同、二〇九ページ）と彼自身で言っている。すなわちそれは、西欧の資本主義的物質文明の底流にある自由主義にほかならない。その原稿を彼が先ず示したのは、当時彼の最も尊敬していた板垣退助（当時高知在住）であったが、板垣に失望して東京に赴き、島田三郎・大隈重信・河野敏謙・陸奥宗光・矢野文雄等に会い、結局田口卯吉の「東京経済雑誌」から湯浅治郎の援助で出版することを得た。また検閲を通過するため、「革命の文字を、悉く改革と代へ」なければならなかったと述懐している（同、四一四ページ参照）が、彼自身は「粗枝大葉」で改革と革命を必ずしも峻別してはいたのではない。

その達意でリズムカルな文章と徹底したイギリス的自由主義的思想により、「欧化主義」の時代に盛んなる評判を、予期以上に得た『将来之日本』の出版を契機に、彼は「大江義塾」を畳んで家を挙げて東京に進出し、湯浅治郎の経済的助力を得て、社会主義思想の源泉と称せられる「民友社」を創設した。爾来「民友社」は一九四八年（昭和二十三年）に社屋をロー

マンス社に譲渡するにいたるまで、六十有余年の間、雑誌・新聞・書籍発行の本拠として、彼の活動の牙城であった。雑誌「国民之友」<sup>(5)</sup>の発行がその最初の仕事であったが、第一号の発刊は一八八七年（明治二十年）二月十五日で、万以上を売って成功を獲得した。すなわち、田口卯吉・尾崎行雄・肥塚龍・島田三郎・矢野文雄・中江兆民・植木枝盛・高橋五郎・志賀重昂・山田美妙・櫻庭篁村・森林太郎・浮田和民・酒井雄三郎・小崎弘道・植村正久・金森通倫・横井時雄・森田思軒・北村透谷・朝比奈知泉等々が寄稿をした。蘇峰自身も日本婦人を論じ、青年の教育を論じ、政治を論じ、人物を論じ、文学を論じ、敘景紀行等の文章も書いた。福地桜痴の「幕府衰亡論」「懷往事談」等をも連載した。社名を「民友社」としたのは、雑誌「ネーション」に倣ったのと、「平民主義を主張し、何処迄も人民の味方を以て自ら任じたからであった」（同、二二三ページ）。かくして「民友社」は、『ジョン・ブライト伝』『ブライスの『平民政治』』『現時の社会主義』『ユーゴー』『マコーレー』『グラッドストーン』『コブデン』『エマーソン』『トルストイ』等々を出版したが、同時に『日本国防論』『国防論』を出版している。『新日本之青年』の出版（二十年三月）も、『将来之日本』に雁行してその売行は凄まじく（同、二三四ページ）、蘇峰の文名は自由民権運動と欧化主義旺盛の時代を背景として彌が上にも高くなり、そのいわゆる泰西的な「平民的急進主義」は、国会開設を前に脚光を浴びることができた。その「平民的急進主義」は要するに近代的キリスト教からの信仰を取り去った青年的なブルジョアデモクラシーの思想であるから、これを「豪農的民権主義」と称することは、無理ではないかと思う（色川大吉「豪農民権への展開」「新日本の進路をもとめて」「明治二十年代の思想・文化」等参照）。「天保の人間よ去れ！」というのが、その心意気であったからである。

かくの如く「はたち台ですでに崖然たる丈夫であった」（蘆花の「告別の辞」参照）蘇峰には、始めから「反抗者」的な性格と、「大勢順応」的な性格とが同居していたのである（蘇峰自伝「六三六ページ」参照）。しかもその一面の強く出る場合と、他の側面ばかりが目立つ場合とがあり、ただ封建主義に対しては常に反対物として存在した。故に、彼の政治思想の変遷を見

るさい、このような生来の性格を看却し得ないし、看却してはならないであろう。彼自身は次ぎのように言っている。曰く「世人が平民主義を説かざる時に、平民主義を説き、世人が宗教の自由を説かざる時に、宗教の自由を説き、世人が婦人の解放を説かざる時に於て、婦人の解放を説いた如き例は、一にして足らない」（同、六三六ページ）。しかも彼は「本来は保守党であつて教育に依つて急進党になつたのではない乎」（同、六三七ページ）とも言い、また大勢順応者ながら「常にその先端を行くことを力めたからして、その時々には、大勢反抗者の如く見えたのである」（同、六三八ページ）とも言っている。要するに彼が、機敏なる「知者」であつたことが明らかであろう。彼はまた「本来臆病ではあるが、意志の力もて、それに打勝つとも云ふべきであらう乎。予は所謂道義上の勇氣といふものに就ては、一人自ら多量に持っているとは思はぬが、併し未だ多く人後に落ちない」と告白している。知者であつた彼はまた「はにかみや」でもあり、「非社交的である」とも稱しているが、親切で愛想のよい一面、好悪の念と癩癪が強く、馬車馬的で、また傍若無人のところがあつた。<sup>(6)</sup> 宗教的な傾向には乏しく、いわば「この世的」で、洗礼も返上したぐらいである。しかし「宗教の愛好者」であつた（同、六九七ページ）から、その庇護に浴した宗教家・社会事業家は数多くあつた。それは新島襄・山室軍平・留岡幸助等だけにはとどまらないのである。

(1) 徳富猪一郎は、一八六一年（文久三年）、母久子の里である熊本県上益城郡杉堂村矢鳥真六宅に生れ、生後間もなく母とともに水俣の豪農で總庄屋の徳富家に帰つた。祖父は美信、父は幕末の英傑・横井小楠の陽明学を奉じた実学党の徳富一敬（渙水）である。彼はその第五子で長男である。正敬・蘇峰と号し、逸民と称した。弟に健次郎（声花）がある。一敬の兄弟（一義・高廉・昌龍）、母方の矢鳥家・親戚の竹崎家の人々も横井小楠の門下であつた。猪一郎は八歳の時、熊本県の高官たりし父の任地熊本の外大江村に移り住むこととなり、九才の時兼坂止水の塾に学んだ。十一才にして熊本洋学校に入学し、明治九年（十四才）東京に赴き英語学校に入学した。間もなく京都同志社に転じ、明治十三年（十八才）卒業寸前に退学した。再び東京に赴いて岡松蘆谷の紹成書院に入り、また重野成斉を訪ねたりしたが、幾何もなく帰国し、翌十四年大江義塾を創立した。その文筆活動と新聞への愛着と投書とはすでに

同志社時代に始つていた。

(2)

新島襄の最も尊重したものは、自由と自治であつた。新島は、「自由自治の春風常に吹きをり候よういたしたく候」と言つていた。また蘇峰も、昭和二十七年八月十五日の筆者への書翰に於て、「基督教ノ信条末梢ニ就着セス其ノ大綱大精神ヲ主持スルコト 新島先生ノ自由主義ヲ服膺シ人間尊重ノ基本ヲ養成スルコト 自治ノ訓練ヲ徹底的ニ行フコト 訓練モ亦自治的ナルヲ要ス 日本ヲ愛シテ之ニ奉仕スルノ志趣ヲ扶植スル事 校風ヲ振作シ世上陥々者流ノ外ニ特立スルノ氣象ヲ長養スル事 之ヲ要スルニ同志社教育ノ大眼目ハ人間尊重ニ存ス 新島先生ハ夷ニ躬ラ之ヲ実践シタル一人ナリキ 以上」と書いている。なお徳富蘇峰「新島襄先生」等参照。

(3)

蘇峰が平和主義を特に強調した著書は、『将来之日本』（明治十九年）であるが、その当時平和主義を唱えていたのはフレンド派の宣教師以外には他になく、北村透谷が「平和」を發行したのはすこしく後のことである。もちろん蘇峰の平和論は、キリスト教的なものではなく、横井小楠の海軍力を背景とした平和論の発展と言えよう。故に彼の平和主義はクエーカー派の主張するパシフィズムではない。またカントの影響も皆無である。彼は、封建社会を「武備社会」と断じ、近代の社会を平民社会または平和社会または「生産社会」または商業国となし、社会は前者から後者へ発展するほかはない、とするのである。故に進歩発展の歴史観がその思想の根本をなしているのである。彼は国権主義を以て「封建社会ノ旧主義ノ変相ニ過ギザル」ものとなし、「我が邦ノ将来ハ……生産国トナル可シ。生産機関ノ発達スル必然ノ理ニ従ヒ。自然ノ結果ニヨリテ平民社会トナル可シ」ト言い、「将来ノ日本ナルモノハ……此ノ自然ノ大勢ニ従ヒ、之ヲ利導スルニアル而已。故人曰ク。達能明了。渾順ニ天地勢ト。実ニ然リ。唯ダ此ノ天地ノ勢ニ順フニアルナリ」と論じ、ブライトの道德主義的平和論に拠つて、「我が茅屋ノ中ニ住スル人民ヨシテ此ノ恩沢ニ浴セシムルハ夷ニ我が社会ヲシテ生命的社会タラシメ。其ノ必然ノ結果タル平民的ノ社会タラシメルニアルコトヲ信ズルナリ。即チ我邦ヨシテ平和主義ヲ採リ以テ商業国タラシメ平民国タラシムルハ夷ニ我国ノ国家生活ヲ保チ。皇室ノ尊榮モ。国家ノ威勢モ。以テ遙々タル将来ニ維持スルノ尤モ善キ手段ニシテ国家将来ノ大経綸ナル者ハ唯此ノ一手段ヲ実践スルニアルヲ信ズルナリ」と説き、これ即ち「維新大改革ノ猛勢ヲバ百尺竿頭ノ外ニ一転」することにほかならないと結んでいるのである。其の平和主義・平民主義が、進化論的必然論に立つものであることは、かくして明らかであるが、武備社会と生産的商業社会とを矛盾対決するものと見たところに弱点があつたと言わねばならない。そして、この理論的な弱点は破綻するほかはないのである。

(4)

蘇峰は「蘇峰自伝」等において、いく度となく父一敬の師・横井小楠の開國・民主・平和の思想について語っているが、例えば「先生胸襟灑脱、心地光明、恒に衆難群謗の業裡に坐し、危地逆境の中心にあるも、夷然として意に介せず。其所謂開國論の如きも、尋常功利の見地より打算し来らず、直に天人一致、四海兄弟の大主旨に基き、我より進みて國を開き、我が王道を以て、世界を化せん

とするに在り。嘗て曰く、苟も我を用ふる者あらば、將に使命を奉じ、先ず米國に説き、一和協同し、而して之を列國に説き、以て四海の戰爭を弭めしめんとすと。乃ち現時の國際連盟の如き、先生既に六七十年前に於て、之を洞見道破したり。先生が所謂天下經綸の道は、富國強兵に止まらず、大義を四方に布くにありと為したるもの、其れ茲に在る歟」（徳富「小楠横井先生頌徳碑文」と言ひ、明治二十二年には、『小楠遺稿』を編纂刊行している。「國民之友」六十八号でも藤田東湖とともに横井小楠を論じ、「卓犖不羈、時俗に容られざる者」と評し、尊敬の意を表している。また深井英五とともにトルストイを訪問してその平和論を聞き、楠井小楠の思想を紹介してトルストイを感嘆久うさせたことがある。また「海山の隔てはあれど隔てなき君が誠の嬉しくもあるか」という和歌を和・英両文で書き記してトルストイに与へ、ト翁を欣ばせてもいる。（蘇峰「トルストイ翁を訪ふ」・徳富青花「竹崎順子」・深井英五「回顧七十年」等参照）。なお田畑忍「横井小楠の平和思想」参照。

蘇峰の姉・初子の夫である湯浅治郎は、群馬県会議長として騰唱論を實行し、また帝國議會開設の際には衆議院議員であり、のち同志社の会計を受持った経歴を有する「資性狷介」のキリスト者であった。詩人・湯浅吉郎はその弟であり、画伯・湯浅一郎はその長子であり、湯浅八郎博士（元同志社総長）は一郎の弟である。

「國民之友」は明治二十年二月創刊の頃は、月一回、やがて二回となり、三回となり、後には週刊とまでなつたが、世間の好奇の心も時間と共に減退し、競争者も世上に可成り出で来り、その為に劈頭ほどの大景氣はなかつたが、しかも總ての点に於て当初占め得たる地歩を失はなかつた……特に「國民之友」が春期、夏期の一年二回の大附録は、一代の文学者を網羅し、恰も時代の水平最準を示すものとなり、又た「國民之友」に其の寄稿を採録せられたるが為に、名を成したる作家も尠くなかつた（『蘇峰自伝』二四三—二四四ページ参照）。「國民之友」第一号には、蘇峰の筆になる「嗟呼國民之友生れたり」が掲載され、それは先ず「日本國何くに在る、日本人民何くに在る」と問い、日本改革の必要を力説強調した激越の文章である。

しかるに松方内閣の勅任参事官に任官して忽ち蘇峰は不人気となり、そのため不振となつた「國民之友」は經費に窮して明治三十一年に廃刊した。すなわち二十年続いたのであるが、明治文化史上その存在の価値と意義は不朽であろう。

このような蘇峰の一面を見た人はすくなくはないと思う。私もそれを直かに経験したことが数回ある。殊にその一例としては、その九十四才の詩碑建立の記念会の時、私の出席を非常に喜んで壇上の席に私を座らせながら、いっしょに行つた年輩の同志社の他の人々に対しては傍若無人だったので、私は困りかつ驚かざるを得なかつたことを憶えている。

彼自らは、「若い時から英語の所謂グールド・ヘーター（Good Hater）であつて、愛することも、可成り少く無いが、憎むことは猶更ら多くは無いかと、自ら顧ることが屢々である」と言ひ、とくに嫌いなものとして「偽善者」と「輕薄、忘恩の徒」と「極端

(7)

(6)

(5)

なる自己中心主義者」とを挙げてゐる。また「俗物」の方がそれらのものよりはまだまだと言ひ、「ぶることが嫌だ」とも言つてゐる。そして、「予は特別に愛するといふ人を持たない。但だ予の好む所の人は、誰にもせよ、一芸一能ある者で、予はこれ等の人々を好むばかりで無く、これを尊敬する。縦令その芸術に就いては、予自ら左程尊敬しなくとも、その芸術に堪能なる人に対しては、何となく頭が下る。但し予は世の所謂成功者なる者に対しては、左程にも思はない」(同、六九三ページ)と言つてゐる。その一面の面目が躍如としてゐる。また五十年代の蘇峰の「国民新聞」におけるワンマンぶりや、甚はだしき癩癩ぶりについては、当時国民新聞の記者で彼を尊敬してゐた後藤是山氏から私は直かに聞いてゐる。

しかし彼が逆境にある者に対して親切であつたことは、例えば不治の病床にあつた彼の秘書・八重樫喜美子に対して情緒溢るる百三十一通の見舞の書信(最後の一通は死後に到着、棺に収められた)を送りつづけた事に徴しても明らかであろう(志村文蔵「徳富蘇峰翁と病床の婦人秘書」・品川義介「蘇峰外伝」等参照)。

## 二

蘇峰はその「幸福」な稀に見る長い生涯において多くの人たちに親切を尽した。親切は人間蘇峰の一特質であつたと言わねばならない。<sup>(1)</sup> 例えば、発足したばかりの「民友社」の仕事に忙殺されながら、新島襄の同志社大学設立運動を極力援助した。彼が「国民の友」に「明治の二先生」と題する文章を発表して、西の新島を東の福沢以上の人物として推称したのも、新島とその事業を天下に紹介せんがためであつた。また新島門下の多くの俊才に「国民之友」に執筆のチャンスを提供し、また盛んに同志社の広告と宣伝をした。『同志社大学設立の旨意』も、新島の意を受けて彼の執筆したものであつた。すわなち「新島先生の依頼に応じて、所謂同志社大学の主意書なるものを起稿することとなつた。世間に評判ある『良心を手腕に運用する人物を養成する』といふ主意書がそれである」(同、二三五ページ)と彼自身で言つてゐるが、当時の彼の教育論とそれは符節を一にしているのである(前掲『新日本の青年』参照)。「同志社通則」も彼の起草したものである。時の外相・井上馨が新島の募金運動を斡旋し、次の外相・大隈重信がこれを引受けて、青木周蔵・陸奥宗光・三好退蔵・渋沢栄一・岩崎弥之助等々から、忽ちにして数万の寄附金を集めることに成功したのも、蘇峰の奔走が与つて大きくあつたのであらう。



日本主義で対外硬的で反キリスト教の陸実も、蘇峰との関係で、その「日本」新聞に賛成の説をかかげたぐらいである。

当時における蘇峰の活躍は殆んどすべて「民友社」発行の「国民之友」に拠っていた。「従って『著作』の暇もなく、又た必要も無かった。固より其間他の雑誌若くは新聞に寄稿したることがあったが、それは寧ろ余儀無き事情の下であったから、精力の殆ど総ては、『国民之友』及び二十三年以来発刊したる「国民新聞」に傾注した」（同、五八三ページ）、と言っている。一八九一年（明治二十四年）六月から刊行して、一九一三年（大正二年）にいたるまで継続して三十六冊を出した「国民叢書」はその副産物にほかならないものであった。時恰かも後藤象次郎の大同団結の国民運動が展開され、井上馨の誘いもあって彼の政治的関心を大いに刺激した。しかし「政治家たるを好まなかつた」蘇峰自身は、政治批評家として、筆と遊説で政治運動を行うにとどまったが、その頃の大問題であった条約改正問題については現実主義的に、というよりも大隈の「雄偉」なる言論に魅せられていた人間的な心情から大隈外相の条約改正政策を支持した。すなわち彼は最初自由民権の板垣を尊敬し、次ぎに改進の大隈にその政治思想の夢を托したのであるが、それは自由党から改進黨への移転と言うことにもなろう。しかし帝國憲法発布のさい、黒田首相主宰の祝賀の夜会に招かれ、ここで父一敬の旧知たる松方正義に邂逅し、藩閥・松方との関係が始まることとなって、その後の運命を決めるきつかけになったのである。かくの如き人間的関係に絡んで、その思想変遷の条件となったものは条約改正の問題で、条約改正問題が平民・平和主義の彼に方向転換をさせて戦争主義へ導いたと言い得よう。

ところで彼はその前に前示の如く「国民新聞」を発刊していたのである。すなわち新島逝去の翌月、一八九〇年（明治二十三年）二月一日に第一号を発行した「国民新聞」は、当時月三回刊行「国民之友」を基盤として、発刊にふみきつた日刊紙であるから、両者はまさに姉妹的の雑誌・新聞の関係ということになる。彼は、この新聞発行について「その主なる目的は、此の新聞を以って改良の目的を達せんが為であった」と言い、当時予の最も熱心であったのは、第一、政治の改良。第

二、社会の改良。第三、文芸の改良。第四、宗教の改良であった。」<sup>(1)</sup>而して『国民新聞』は、以上の改良に向つて、自ら急先鋒を以つて任じて居た。その中でも、政治の改良が予の最も熱中する所であつた。如何にして政治を改良する乎。予の当時の意見は何よりも先づ藩閥政府の打破であつた<sup>(2)</sup>（同、二六六ページ）と言つて居る。かくして彼は、井上・松方・青木・陸奥・西園寺等の親近関係者中、先づ陸奥に情報を得て松方内閣の弱点を叩いた。また第二次伊藤内閣になつて、この藩閥内閣を援けた「吏党」としての自由党と対決した結果、自由黨員の「国民新聞」不買同盟を惹起し、親しかりし陸奥・西園寺等とも離れることとなつた。彼は屈せず、反対に「対外硬」を唱えていた在野六派連合に加担した<sup>(3)</sup>。陸奥を中心人物とした六派連合には、「政府党及び当時に於ては、準政府党とも云ふべき自由党の外は新聞、雑誌は」何れもすべて参加して、まさにそれは全日本を席捲する概があつた。すなわち陸奥の周辺には、国粋論者たる谷干城・鳥尾小弥太・三浦觀樹等の老將軍から、副島種臣そして神鞭知常・高橋健三等を始めとして、伊藤博文系の井上毅・別系の杉浦重剛、陸奥宗光系の小村寿太郎等が集り、蘇峰もまたこのグループに加つたのである。かくして事実上、六派連合の運動は、「日本新聞」の社長陸奥と、「国民新聞」の社長徳富猪一郎とによつて進められた観がある（川辺真藏『羯南と蘇峯』等参照）。

遑つて、両者の接近について見れば、一八八六年（明治十九年）に、蘇峰を陸奥に紹介したものがあつた。それは、和田正脩（同志社の出身で双方の友人）であつた。陸奥は蘇峰の『将来之日本』を大いに評価し、また蘇峰は『国民新聞』に一年先んじてすでに「日本」新聞を経営せる硬骨の陸奥に敬意を抱いていたのである。例えば、「陸氏は狷介不群、氣節を以つて立つ昂々乎たる東北の一男児として知られ、又た莊重勁拔の文章に秀でたる記者として知られてゐたが」、「善き意味に於て、なかなか謀を好んだる策士で」、「政治上に就ては、可成り融通も利いて居た。」<sup>(4)</sup>「陸君の思慮はなかなか周到で、予の如き粗枝大葉の者が、とても追付くところでは無いと考へた事が、幾度かあつた」と評している（蘇峰自伝二八四—二八五ページ参照）。

もちろん彼は六派連合の「対外硬」には心からは感服せず。その造語にかかる「自主外交」を主張し、内地雜居賛成論を

唱えていた。その主宰せる「民友社」から『自主的外交』<sup>(3)</sup>なる小冊子を刊行したぐらいであるが、六派連合に加って国民運動に熱中しているうちに、欧化主義の急進論者は自然彼から離れてゆき、反対に近衛公・二条公・谷（干）・品川（弥）・高島（軾）・樺山（資）等が入れかわって接近した。「対外硬」の連中の中であって、条約勵行論とともに「自主外交論」を主張した彼は、日清の風雲急を告げるに及んで更に一步をすすめて積極的な主戦論者たるにいたった。すなわち第一に条約改正の問題、次ぎに「始めて挙国一致が実現せられた」（徳富『昭和国民読本』四ページ）日清戦争への国家的動きが、彼の血気を刺激してその政治思想を著るしく変えたのである。かくて「国民新聞」は文治主義・平和主義を棄てて、主戦主義の新聞に転向したのである。しかし彼が新聞のオーナーでなく、また「記者」でなかったならば、このような大きな変化と、それ以後の連鎖的現象も或いはなくて済んだであろうが、とにかく戦雲は明治日本牽引の意気軒昂たりし彼と彼の新聞を否応なく戦争へ驀進させた。然り、彼はその名のどうりに猪突猛進したのである。それは止むなく時流に追随したというような弱々しきものではない。すなわち、その大勢順応ぶりは「朝鮮問題に就いて、清国の態度甚はだ横暴にして、動もすれば朝鮮を併呑して、吾を威嚇せんとするの勢を示し、吾が帝国の国防上一大危険の迫りたるを見るや、吾社は猛然として、朝鮮に向け出兵を主張した」（同、二九一ページ）と言っているとおり、大勢の先頭に立って順応の旗を振りしものである。すなわち北村透谷や木下尚江の純粹なる平和主義と、彼の政策的平和思想との全く異なる面目をそれは示しているものと言えよう。

蘇峰がその最高の傑作とも言うべき『吉田松陰』を出版したのは、恰かもかくの如き一八九三年（明治二十六年）のことであつて、すなわちこの著は彼が「革命的健児」と称した吉田松陰の革命的精神に共鳴し、これを完璧にそして客観的に描出しているものと評し得よう。<sup>(4)</sup>人は、この著に、その初期の著作を締めくくっている側面と爾後の大著作活動の基軸をなしている側面とを見出すことができよう。その一八九三年刊行の該著は十三版を重ねて一九〇八年（明治四十一年）に改訂版を出

し、これも一九一七年（大正六年）には二十版を重ねて、彼の著作中最も多く読者を有するものの一つである。否、この一書こそは、吉田松陰を中心として敘述された概観維新史ともいふべきものであつて、百巻より成る巨著『近世日本国民史』のまさに基点になつたものと、私は考へるのである。

(1) 蘇峰の姪の久布白落実女史は、蘇峰の親孝行について次ぎのように言つてゐる。曰く「母は言つた、〃猪一郎さんの勉強と、親孝行と、愛国心これとはほんとうだ。自分もそれほうそではないと思ふ」(『民友』第三号)。彼は両親に孝であつただけでなく、君に忠、兄弟に友、また朋友をできるだけ多く援けた。彼が彼にそむいた異常の天才の弟・芦花に親切であつたことも知られてゐる。「民友社」関係だけを考へて見ても、北村透谷・国木田独歩・山路愛山・人見一太郎・馬場恒吾・河田嗣郎等々数えきれないぐらゐに多くの人材を世に認めさせる媒介をした。元良勇次郎・池袋清風・大西祝・家永豊吉・深井英五・品川義介・留岡幸助・山室軍平・古屋久綱・牧野虎次・今井新太郎等々の同志社関係者も、社会的活動等に於て直接間接に彼の庇護を大きく受けた。彼と思想を異にする進歩的な人たちは彼の好遇に接したものが多くあつた。しかも彼に援助されながら叛いた忘恩者もすくなくはない。彼が忘恩者をきらつたゆえんであらう。同志社大学が明治四十五年に漸やく発足するにいたつたのも、蘇峰の熱心なる斡旋運動のあつた賜である。

(2) 条約改正は、これに手を着けた井上馨が失敗し、継承した大隈重信が同じく失敗して爆弾で隻脚を失い、結局第二次伊藤内閣の外相・陸奥宗光が改正に成功したのであるが、六派連合はこの伊藤内閣とその準与党となつた自由党に対して結成された対外硬的な共同戦線にはかならない。すなわち蘇峰は、左右より成るこの野党連合に参加したのであるが、その立場は改進黨の主張する条約勵行論であり、その主張は對等の条約をその目的としたものである。

(3) 『自主的外交』なる小冊子は、その持論たる自主的外交主義の趣旨を、「民友社」の一員に執筆せしめて出版したものである。蘇峰は、この用語を自ら發明したもので、同様の「皇室中心主義」の言葉とともに後々にまで使われたとして、次ぎの如くに言つてゐる。曰く「対外硬の名は、その時限りの文字として、消失したが、自主的外交の文字は、今日に於ても猶ほ生命ある文字として、現存してゐる。」(『蘇峰自伝』二九〇ページ)と述べてゐる。

(4) 蘇峰は、『吉田松陰』を著す前に、すでに横井小楠・福沢諭吉・新島襄・伊藤博文・大隈重信・井上馨・山県有朋・元田永孚・勝海舟・頼山陽等の人物論を書いてゐる。そしてその何れもが、すぐれた短篇の人物論で、心憎き出来栄のものが多い。引きつづいて諸葛孔明・福地桜痴・中江兆民・田口卯吉・森田思軒・大西祝・浮田和民・山路愛山・島田三郎・トルストイ・井上毅・川上操六・星亨・李鴻章・セシルローズ・西郷従道・徳川家康・小早川隆景・広瀬次夫・マカローフ・北条時宗・明恵上人・ブリス大将・細川

幽齋・小村壽太郎・乃木希典・桂太郎・原敬・大山巖・ハリス・クレマンソウ・アスキス・レーニン・トロッキー・白隱・森鷗外・尾崎紅葉・山田美妙・大杉栄・長谷川二葉亭・坪内逍遙・内田魯庵等々幾多の短篇をつくったが、『公爵桂太郎伝』乾坤二冊（大正六年）・『吐甫と弥耳敦』（大正六年）・『西郷南洲先生』（大正十五年）・『頼山陽』（大正十五年）・『大久保甲東』（昭和二年）・『木戸松菊先生』（昭和三年）・『公爵松方正義伝』二冊（昭和十年）・『公爵山県有朋伝』三冊（昭和八年）・『勝海舟伝』（昭和七年）等大冊の人物論も沢山著わしている。その他短篇を集めた『第一人物随録』『第二人物随録』『人物偶評等』を刊行している。大正七年七月から『国民新聞』に連載を始めた『近世日本国民史』も畢竟超巨大の人物論だと言ふこともできよう。これを要するに徳富史学は「人物史学」にはかならない。『吉田松陰』は、その人物論乃至史論の粹であり、従つて蘇峰文業中の白眉と言ふことができよう。

彼の文業は、しかし人物論・史論・政治論・時局時事評論・教育論・文明論にとどまらず、小説批評・叙景叙情・旅行記・書評・小品・随筆等々極めて多方面にわたつて絢爛たるものがある。ただ経済論は、彼の得意とするところではなく、その点福沢論吉の業績と異つてゐる。政治主義の彼と福沢の経済主義の相異と言えよう。もちろん、その政治思想は、初期においては、『新日本之青年』（明治十八年、二十年）と『将来之日本』（明治十九年）と『日本国防論』（明治二十二年）が中心であり、転向して以降のものとしては、『大日本膨脹論』（明治二十七年）・『近時政局史論』『時務一家言』（大正二年）・『世界の変局』（大正四年）『大正の青年と帝国の前途』（大正五年）『大戦後の世界と日本』（大正九年）『皇室と国民』（昭和三年）『昭和一新論』（昭和二年）、『日本帝国の一転機』（昭和四年）『勝利者の悲哀』（昭和二十七年）等が屈指されよう。百巻の『近世日本国民史』を含めて著書三百五十余冊。なかんづく、いわゆる洛陽の紙価を高からしめたものは、『大正の青年と帝国の前途』であつた。

### 三

以上の敘述で明らかかなように、元来ナシヨナリストであつた蘇峰の政治思想は、一八九四・五年（明治二十七八年）の「日清戦役」を契機として、平和主義より戦争主義への変貌を明確に示すにいたつた。

彼自身も、「予が一生にとつては、又たこれが一大転機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戦いたる一人である。此に最後迄と云ふのは、議會開会前後から、従来の民権論者にも、彼の藩閥政府と妥協したものがあつたからだ。然るに一度二十七八年役が起るや、予が藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、挙国一致清国に衝る事を当面の急務とし、それに

向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犠牲とした……苟も公人として世に立つからには、大勢に順応して、大勢を率いると云ふ事は、当然の事であらう」(『蘇峰自伝』二九三ページ)と言つて居る。また「順応」は、そもそもその尊敬する「横井小楠の学問の本旨」(同、六三六ページ)であるとも言つて居るが、大勢順応は元来ジャーナリズムの道であつて、学者であり詩人であり、政治家の資質をも具えていた蘇峰の本質はしかし偉大なる「記者」<sup>ジャーナリスト</sup>たり「史家」たるところにある。すなわち彼は記憶力抜群で古今東西の史実に精通しているけれども、思想徹底の哲人(思想家)ではない。いわゆる「変化」を以て彼の性質と見られているゆえんである。彼自らも「予は徹上徹下、新聞記者を以つて任じてゐる……予の著作も亦新聞記者の著作である。従つてその十中の七八までは、対応投棄を目的とし、必しもこれを千古に伝へんと欲するが如き、大野心を持たない」(同、五九一ページ)と言つて居る。しかし彼の平民主義や平和主義が、日清戦争への協力と思想的変更で雲散霧消したのでは決してない。「その実予は決して平民主義を捨てたのでは無かつた」(同、四〇〇ページ)と言つて居るとおり、最初からナシヨナリズムに結びつき、のちには戦争に結びついて、なおその平民主義と平和主義は生涯の最後まで残つていたのである。その点、いわゆる「下から」の民権論者の中に国権論的となり官民調和論者になつた福沢諭吉の場合とすこしく趣きを異にしているのである。すなわち戦争愛好の福沢(田畑忍「福沢諭吉の戦争愛好思想」参照)に平和主義の皆無であつた点が異つて居るのである。更に「上から」の天賦人權論を弊履の如くに棄てて、社会的ダーヴィニズムの国権論に転向しキリスト教等の弱い者いじめをやつた加藤弘之とは大異して居るところである(田畑忍「加藤弘之の国家思想」参照)。けたいし三者は、三様のナシヨナリストであつたといふことになる。人を殺す英雄をきらつた日本主義でかつ名分尊重主義の陸実は、さらにまた異つた国土型のナシヨナリストであつたと見るべきであらう(田畑忍「陸羯南の政治思想」参照)。

当時、彼等のながで日清戦争を最も強く支持したものは福沢諭吉であつた。すなわち福沢は義捐金を募り、自らも大金を

軍に献納し、戦捷にさいしては随喜の涙を流して、ありがたいとも言いようがないと叫んだことが、その『福翁自伝』に稚氣たっぷり描かれている。蘇峰自身は献金はしなかったが、「日本国民の膨脹性」（一八九四年（明治二十七年）六月）と「経世の二大動機」（明治二十七年十一月）「征清の真意義」（明治二十七年十二月）等を書き、また『大日本膨脹論』を一八九四年十二月に出版して、戦捷必至の願望を展開したのである。内村鑑三も、当時は「正義」の戦争を肯定していた頃で、『日清戦争の義』と題する一篇を、和英両文で執筆して日清戦争に協力した。しかし開戦後間もなく戦争に正義の戦争の無いことを感ずるようになり、日清戦争中に非戦論への出発を始めることになったのは、内村が蘇峰や福沢と異り予言者であり思想家であった、と言われるゆえんであろう。

しかし当時にも、日清戦争反対を考えかつ口にしたものが少数はあったもの、それは反戦論を筆にするものとはなかつた時代である。従って平和主義を唱えていた蘇峰が、日清戦争を契機に瞭然として戦争主唱者となつただけでなく、俊敏な戦争取材活動をすることにより忽ちにして軍部と権力の懐中に深く入り込んだことに人々は驚かなかつた。むしろ彼は陸軍の実力者で『平民的』であつた」と言われる参謀次長の川上操六を自然に肝胆相照らす友人とするようになった。すなわち『国民新聞』は是迄は軍隊仲間にも評判が善くなく又た所謂薩長人士の如きは、極めて少数なる松方公其他を除けば、徳富などは国を売る逆賊でなければ、その手先き位に考へられてゐたものであつたが、予が此の戦争に対し、凡有る犠牲を顧へりみず、奉公の誠を効さんとする態度は、追々彼等の諒とする処となり、その中には意外の方面に、意外の友人も出で来た。その中で最も先に挙ぐべきは川上將軍であらう」（同、二九五ページ）と、卒直に言つてゐるとうりである。かくしてまた彼は、日清戦争を介して小村寿太郎を知り、伊藤（博）・山県（有）を知るにいたつたが、殊に市民的な將軍と称せられた桂太郎（当時第三師団長）とは、遼東半島の戦地を駆けめぐつていたさいの出会いによつて親しくなつた。彼はこのように川上・桂と昵懇となり、更に三国干渉による遼東還附の事実を目撃するに及んで軍と戦争へのその傾斜は愈々極端にな

り、従つて「國民之友」及び「國民新聞」の記事論調等もまた次第に益々變化せざるを得なくなつた。すなわち彼は次ぎのように言つてゐる。曰く、「かねて伊藤内閣とは外交問題で戦つたが、今更らながら眼前に遼東還附を見せつけられたには、開いた口が塞らないと云ふばかりでは無かつた。此の遼東還附が、予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以来、予は精神的に殆ど別人となつた。而してこれと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ、如何なる正義公道も、半文の価値も無いと確信するに至つた。そこで予は一刻も他國に返還したる土地に居るを辱しとせず、最近の御用船を見附けて帰へる事とした。而して土産には旅順口の波打際から、小石や砂利を一握り手巾に包んで持ち帰つた」(同、三一〇—一ページ)。彼以上に日清戦争に熱中した福沢諭吉は、しかし還附やむなしと考ふる理性と余裕もあつて、そのように主張したのであるが、もともと伊藤ぎらいの蘇峰は露・独・仏の干渉に屈し去つた「対外軟」の伊藤博文とその内閣を感情に逸つて憎悪し攻撃した。要するに彼は、「遼東還附と云うことが腹一杯になり、それが予の身も魂も殆ど喰ひ尽し、焼き尽す程であつた。予は十年後にせよ、二十年後にせよ、將た百年の後にせよ、此の屈辱を招くに至らしめたのは、軍隊でもなく、國民でもない。要するに伊藤内閣の外交が、其の宜しきを誤つたからである」(同、三二三ページ)と考へたのである。

このようにしてナシヨナリスト蘇峰の帝國主義への方向が決定したのであり、それは川上・桂等と彼が計画して拓いて行つた日露戦争への道にほかならない。しかもそうした蘇峰の傾向は國民の非難を受ける筈はなく、大歓迎を受けたのである。それは國民的な好戦ムードに従つての變貌であつたからである。従つて内村鑑三・木下尚江・安部磯雄・堺枯川・幸徳秋水等<sup>(3)</sup>の日露戦争反対の言論が、國民に對決しこれと交叉して荆棘の道を歩まざるを得なかつたのは対蹠的であらう。否、当時の現実<sup>(3)</sup>に即した蘇峰の帝國主義的政治思想は、更に外遊により拍車を加えられて福沢の富國強兵の思想以上に強烈なものとなり、日本主義の陸奥さえもどうてい及ばざる程のものになり、漸やく世人を瞳若たらしめたのだ。すなわち、松方に



極めて近い関係にあった彼は、かくして大隈を松方に接近せしめ、戦争準備の松隈内閣の成立のために伊藤内閣の瓦解を計画して成功した。一八九六年（明治二十九年）、彼の策した松方・大隈の接近は彼の外遊中に実現し、松隈内閣もまた実現した（一八九六年九月八日）。しかし彼が、一年有余のヨーロッパ旅行（この旅行中には思想を異にするトルストイをヤスヤナポリヤナに訪ねて交歓している）を終えて帰国した時（一九九七年六月末）には、松方内閣は内訌のために全くの危機にあった。それにもかかわらず彼は、乞われるままに「天下第一の大馬鹿者」（徳富『時務一家言』参照）よろしく勅任参事官に任官した。松方系であり乍ら、任官せずして埒を守った陸奥とはおよそ異なるところであるが、それは父を喜ばそうとする「孝」のためでもあったと同時に、「遼東還附屈辱」のために軍備拡張と増税を行わしめようとする魂胆のためでもあった。すなわち彼は、政府における地位を利用して、「国民新聞」に此の趣旨の記事を書きまくった。新聞と政府をその手中に収めてのかくの如き得意の活躍が、他社等の怨みを買うことは自然と言えよう。しかし彼の覚悟は尋常様ではなかったのである。すなわち、「露国を目標として、吾が国運の伸張を計ることだけは忘れてはならぬ。これが為ならば如何なることでも犠牲とする。即ち己一個の名誉や信用などは、鴻毛よりも軽しと覚悟した」（同、三三〇ページ）と言っているとおり、洋行によって絶頂に達した彼の人気は任官によって忽ち地に墜ちてしまった。さすがにこの不人気には蘇峰も腐らざるを得なかった。すなわち覚悟の上ながら、「主義を犠牲として、節操を犠牲として、世間の名誉富貴に殉つたる者」とされたのは「心外千万であった」のだ。『かくすればかくなるものとしりながら、止むにやまれぬ大和魂』という気持でやったのであるが、予の知己とも、親友とも云ふべき人々にさえも、諒解せられなかった」（同、三三八ページ）と嘆息した。唯だ両親と勝海舟とが例外的に理解者であったが、一八九八年（明治三十一年）になって、彼は「公人として殆ど全く葬られ尽した。変節漢とか、藩閥への降伏者とか、其他凡有る悪名は、遠慮会釈なく予に雨集し来った。予は今更それに驚きもしなかった……」（同、三四三ページ）、と言っている如くである。例えば烏谷部春汀は蘇峰が「名利に急ぎて一世の疑惑を受くる地位に立てるを悲し

む」〔春汀全集第二巻〕と批判し、内村鑑三も彼を非難した一人であった（内村「ドクター新島の愛弟子」参照。彼の弟蘆花も「帝國主義の旗幟を押し立て、其新聞を提げて一意時の政府を助けた」（芦花「富士」）蘇峰に頗る批判的であったのである。しかし結局に於て蘇峰は平気であつたと評し得よう。しかも彼が好意をもって支持し來つた大隈のこの逆境に於ての不親切・不信に對しては容すことができず、「爾來……約十ヶ年ばかりは、大隈侯との交際を断絶し去つた」（同、三四四ページ）と言っている。彼はしかし言論的非難等に加えて、更に經濟面での追撃を喫して遂に「國民之友」「家庭雜誌」（一八九二年創刊）〔For East〕（一八九七年創刊）の三誌を廢刊し、事業を「國民新聞」一本に縮小して、漸やくこの窮境を切り抜けるほかはなかつた。しかし「國民之友」の廢刊は「民友社」の精神的死滅を意味した。すなわち彼の犠牲は余りにも高価であつたが、それは彼が「記者」としての埒を越えて崩壊しつゝあつた内閣に入つたためであつて、その「對露硬」の思想や運動のためでは決してない。とにかくこの任官が彼の一生の大失敗であつたことは疑いがない。

もちろん蘇峰は、この災難にも屈することがなく、「軍備拡張」「露國膺徵」の硬外交の路線強化のためにがんばりぬいた。そこで彼が次ぎに利用したのは、かつて毛嫌ひしていた元來親露主義の伊藤博文である。この第三次伊藤内閣（明治三十一年一月―三十一年六月）は松方内閣の外交政策を繼承してゐたからである。すなわち、この内閣の軍備拡充・増稅政策に反對を唱えて自由党と進歩党が合併してつゝつた憲政党が、國を挙げて謳歌せられる中であつて、彼の「國民新聞」のみは屹然孤立して、評判悪しき内閣を激励して戦争への政策促進のために猛進した。第三次伊藤内閣のあとに成立した憲政党的隈板内閣（明治三十一年六月―三十一年十一月）もその内訌から短命に終つて、第二次山県内閣すなわち山県・松方の連立内閣（明治三十一年十一月―三十三年十月）が出現して自由党がその提携者になつた。このような一年間のめまぐるしき政變のうち、その「露國に對する目的」が、「漸次に具体化して、進行して行つたこと」（同、三五四ページ）を、「私かに愉快と」した彼は、松方と親しい關係から山県及びその懷刀である平田東助とも親善關係に這入つて行つたが、山県を勝海舟と並ぶ明

治きつての家康流の大政治家と思うようになり（徳富『公爵山眞有朋伝』等参照）、対露政策遂行のためこの内閣を懸命に援助した。彼はこの時、鳥谷部春汀等から、また世間から、御用記者云々の非難を再び浴びせかけられたのである（例えば『春汀全集』第二巻参照）。伊藤はこの間に自由党と国民協議会・進歩党の一部と官僚をその傘下に集めて政友会をつくった。かくして成立した第四次伊藤内閣（明治三十三年十月一三十四年五月）も内部事情のために短命に終り、次で桂内閣（明治三十四年六月一三十八年一月）が実現した。日清戦争で蘇峰を知った桂は、直ちに松方を介して蘇峰に接近した。蘇峰は先ず彼の持論たる対露硬の外交路線としての日英同盟を締結せしめることに成功した。しかし、桂内閣の戦争準備の路線の進行に伴って、内村鑑三・木下尚江・石川三四郎・安部磯雄・幸徳秋水・堺枯川・柏木義円等の反戦運動と社会主義の運動が果敢に展開され、これに対する弾圧もまた行われたが、蘇峰の弟蘆花もまたトルストイ流の平和思想をもつて蘇峰に対抗したのである。この間に於て、蘇峰と桂との「関係は、好縁か悪縁か桂公の死する迄、継続した」（同、三八三ページ）。彼の弟蘆花が兄蘇峰への告別の辞を公表したのが、その前年（明治三十六年）である。その中で、蘆花は次ぎの如くに言っている。曰く、「強き君は、自ら力に同情し、弱き余は自ら弱きに同情す。複雑なる性格の君は、世に処して軻曲を辞せず、単純の余は、偏に直截を好む。経世家の君は、国家の上に立つ。折衷譲歩は、事を為す者の金誠、君が一雙眼は、常に利理を離れず……思想界に住む者は、枉げざるを以て骨とす。……経世の手段に於ても、君は国力の膨張に、重きを置きて、帝国主義を執り余はユゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の流れを汲んで、人道の大義を執る。……兄弟林を同じくするも、夢は東西に飛ぶ。鳥鵲今宵一枝に棲むも、明朝は、南天北地の身なり、骨肉は情なり。傾向は天なり。各々賦命に従うて自己を發揮せんのみ……」（徳富蘆花『黒潮』序文）と。

蘇峰はしかし次のようにその立場を述懐している。曰く「予が世間から変節漢と云はれ、平民主義の裏切り者と云はれ、私益の為に従来の政友を棄てたものと云はれ、甚だしきは政治的売徳漢と云はれ、凡有る字引にない新字までも製造して、

予を罵つたものもあり、中にはその世間の悪口非難の為に惑はされて、從來予に親しき者さへも疎遠となり、謂はば予の崇拜者と云はるる者からまでも、半ばは見限らるるに至つたに拘はらず、明治二十八年の春以来、如何なる艱難辛苦も凌いで、是非共遼東還附の屈辱を雪ぐべしと決心したる予が、今此に開戦の詔勅を捧読するに至つたのは、予に取つては如何に快心のことであつた乎」と嘆じ、また「官僚臭紛々たる連中と伍して、步趨を一にする場合には、可成り不愉快のこともあり、又た癩にさわつたこともあつた。然も一切のことはこの詔勅を捧読して恰も雲霧を排して、青天を見るが如き心地して、此上は死んでも悔ゆるなしといふ程の、痛快味を感じるに至つた」(同、三八八ページ)と言つてゐるのである。

かくして彼は三十七八年の戦役中、首相・桂太郎と終始一心同体となつて戦捷のためは挺身した。しかも「豊大閣征韓の役に徴しても、外征軍は曠日弥久なるべからず、第一段の目的さへ達すれば、それにてずんずん切り上ぐべきことが、大切であることを、信じていたから、三十八年奉天の大会戦と、日本海々戦の後には、唯だ一日も早く講和の日の来ることを待望し」(同、三九〇ページ)、「国家第一、新聞第二と考へ」て、政府の機密を守つて新聞営業をその犠牲とした。しかも戦捷の結果がポーツマス条約で、「我には不利であつて、露国には有利であつた」(同、二九五ページ)ため、「不満足は勿論失望は愚か、国民はこれを以つて、遼東還附以上の屈辱と信じた」が、こんどの場合彼は遼東還附の時とは反対に、桂内閣とその小村外交を攻撃するわけにはゆかなかつた。すなわち「斯る場合に於て、当局者が攻撃せらるるは勿論だが、当局者と共に、意見を同じくして、天下の与論に反抗したる当時の『国民新聞』が、その矢面に立つことは、寧ろ当然にすぎる程、当然のことであつた」(同、三九七ページ)が、戦争によつて大発展をした「御用新聞」の国民新聞社は、「戦捷における群集の為に、踏潰され、叩潰されんとした」(同、三九八ページ)。そこで「暴徒云々の広告を、各新聞に依頼して出したが、何れも暴徒の語に辟易して、これを肯じなかつた」。しかし国民新聞には「暴徒襲來などと掲げて、飽迄当時の与論に挑戦した」(同、三九九ページ)が、焼打に會つて(明治三十八年九月五日)敗売ルートも配達連絡も目茶目茶の破目になつ

た。しかし彼は屈せず、更にその主張貫徹のために、要所要所に、主として市町村役場に国民新聞の無代価配布を敢行した。すなわち桂内閣は、戦争を完遂して一九〇五年(明治三十八年)十二月に退陣し、西園寺内閣が後を襲った。彼はこの経験で日清戦争当時の伊藤博文・陸奥宗光を理解し評価するようにもなった。とにかく桂内閣は足掛け五年六カ月以上在任して内閣始つて以来の長期にわたる内閣となった。蘇峰は遠東半島還附以来のその執拗なる戦争政治目的を果し得て満足し、政治から解放されて朝鮮と支那に遊び、帰国後『七十八日遊記』を刊行し、また国民新聞を思いきって俗化し(明治三十九年)、紙数を増大して、これまた成功した。こうした景気が一九二二年(明治四十五年)まで続いたのであるが、この間彼は桂とともに朝鮮併合を策し、また対米硬の些かの傾向をもあらわすようになったのである。

かくして第二次桂内閣(明治四十一年七月―四十四年八月)は朝鮮合併を実現して、彼は「京城日報」を経営するにいたつた。また貴族院議員にも勅選された(一九一一年・明治四十四年)が、こんどは不人気になることはなかった。しかし一九二二年(明治四十五年)明治天皇崩御にさいして内大臣となった桂が、大正元年第二次西園寺内閣を継いで第三次桂内閣(大正元年十二月―大正二年二月)をつくつたため、桂は全天下を敵とするにいたつた。蘇峰が皇室中心主義を唱えて『明治天皇御宇史』を著述せんとしたのはこの年であるが、彼はまた桂を援けんとして桂党たる立憲同志会をつくらせることに奔走した。しかも逆に犬養毅・尾崎行雄を先頭とした護憲運動が澎湃として擡頭し、国会における尾崎の弾劾演説が桂を倒した。かくしてまた、「国民新聞」が第二回目の焼打にあつたのはこの時であり、かつて彼と思想を異にして不和となつていた弟の蘆花が、「国民新聞」の加勢に乗出してきたのもこの時である。彼は元氣を出して新聞の回復に力めたが、一九一三年(大正二年)十月、彼の吹く笛で活躍してきた桂が病没して、その生涯は大変化をすることとなった。すなわち否応なく政治推進の権力的地位と俗務から解放され、「記者」としての彼自身を恢復して、大歴史家としての面目を發揮する機会を得たのである。『時務一家言』と『政治家としての桂公』の二著を先ずこの頃に刊行した。

(1) 明治二十七年、『日清戦争の義』のほかにも、「世界歴史に徴して日支の關係を論ず」「日清戦争の目的如何」を書いて、日清戦争の弁護をした内村鑑三は、のちに次ぎのように言っている。曰く「……私も終い此頃まで、戦争の悪いと云ふことが如何にしても分らず、基督教を信じて以来茲に二十三、四年に涉りしも、私も可戦論者の一人でありました、……カライルの『コロムウエル伝』を聖書に次ぐの書と見做しました私は正義は此世に於ては剣を以て決行すべきものであるとのみ思ひました。然るに……戦争に関する私の考へは全く一変しました、私は永い間、米國に在るクエーカー派の私の友人の言に逆い可戦説を維持して来ましたが、然るに此二三年前頃より終に彼等に降参を申込まねばならなくなりました、或人は是れが爲めに「変説」を以て私を責めますが、ドーモ致し方がありません、私は戦争問題に關しては実に変節致しました、西洋の諺にも「智者は変ずる」と云ふことがありますから、私の如き愚かなる者、若し充分なる適當の理由がありますれば、斯かる問題に關しては説を変じても宜しからふと思ひます」(内村「余が非戦論者となりし由来」。なお田畑忍「内村鑑三に於ける平和主義思想の展開」「現代思想における内村鑑三の非戦論と平和主義」等参照。

(2) 内村鑑三の非戦論への転向は前示註の一に記したところであるが、その非戦論は明治三十年代に、政府及び軍部の戦争政策に対して反比例的に確固たるものとなり、殊に日露の風雲急を告げるに及んで顕著となつた(前示拙稿等参照)。堺枯川・幸徳秋水等も内村と響を並べて「萬朝報」に抛つて反戦の論陣を張つた。「萬朝報」の社主・黒岩涙香が主戦の主張に交るにいたつて、彼等は平民社をつくつて週刊「平民新聞」を創刊し、社会主義と平和主義の牙城とした。木下尚江・安部磯雄・西川光次郎・片山潜・石川三四郎等もまたこの運動に参加した。柏木義田も「上毛教会月報」に抛つて反戦論を展開した。

愈々開戦になると、矢部喜好等が良心的兵役忌避を断行した。木下尚江が『良人の告白』『火の柱』などの反戦平和の小説を発表し、与謝野晶子が「君死に給うことなかれ」という反戦の長詩をつくつたのも、この戦争の最中であつた。

(3) 徳富健次郎『富士』第四卷七ページ参照。芦花は洋行によつて蘇峰の帝国主義の強化したことを次ぎのように言っている。曰く「日清戦争後の寅一は、最早戦前の彼ではなかつた。世界一週前の彼で、洋行後の彼はなかつた。世界を廻つて白人の圧迫を痛感した彼は、藩閥の、薩長の、官の、内輪喧嘩の小ぜり合いをする時でない、國を挙げて一団となつて外に当らねばならぬ事を痛感した。」

(4) 蘇峰は、第三次桂内閣の崩壊した後に次ぎのように言っている。曰く。「桂内閣の成立と同時に、松方侯の紹介にて——予より求めたるにあらず——桂公と会見し、之を久うして、桂公の政見が、大体に於て、予が意見と大差なきを確め、爾来十有余年は、予に取て比較的精神上の快的なる生涯を送るを得た」「世人は予を目して、御用記者と云へり。されど予は桂公の政友たる以外に、何等の義務にも服したるなし」(『時務一家言』縮言)と。而して、其の死後、「今此に桂公と別れたことは、悲しくはあるが、予自身としては何となく新たな世界に投出されたる如き感があつて、更に一段の新生活を打出すべく、英氣を加え來つた。……併し予は今日

でも機会があれば、桂公の墓に詣ることを忘れ得ない」（『蘇峰自伝』四四一ページ）と言っている。また『公爵桂太郎伝』は若槻礼次郎の依嘱で彼の編纂せしものである。桂が蘇峰に書き与えた書に「一日に十里のみちを行よりも十日に十里ゆくぞ楽しき」というのがある。

四

桂の死後すなわち大正時代になって、蘇峰は権力筋から離れて自由なる時間を恵まれ、エネルギーのすべてを修史を主とした執筆に費やし得た。かくして、『近世日本国民史』執筆への着手は彼の五十才代のことであるが、一九一四年（大正三年）その第一巻の執筆中に父一敬を失ったので、発表はおくれて一九一八年（大正七年）の七月一日から『国民新聞』にその連載を始めることができたのである。このライフワーク百巻の完成したのは一九五二年（昭和二十七年）四月二十日のことであった。

しかし一九一五年（大正四年）には、『世界の変局』と『両京去留誌』と『蘇峰文選』、一九一六年（大正五年）には『大正の青年と帝国の前途』、一九一七年（大正六年）には『公爵桂太郎伝』と『杜甫と弥耳敦』、一九一八年（大正七年）には『支那漫遊記』と『修史述懐』等を出版している。また一九一九年（大正八年）母久子の死と自らの大病の翌年には『大戦後の世界と日本』を出版した。その一部分の『日米の關係』を英文で米国のマクミランより刊行した。また、この間において、『国民新聞』一万号を記念して財団法人国民教育奨励会を創立し、還暦記念に青山会館を創立した。新聞の経営と修史その他の執筆と著作（国民史のほか、『蘇峯詩草』、『平洲先生小語』、『国民教育論』、『国民自覚論』、『政界の革新』、『蘇峯隨筆』、『三十七年役と外交』、『大正婦人の新教養』、諸種の伝記及び隨筆等々）、これらの仕事は「成金時代」「黄金崇拜」時代と彼の呼んだ（徳富『昭和国民読本』八ページ）大正デモクラシー時代における皇室中心主義標榜の文豪・蘇峰の生き甲斐であった。

しかるに、一九一三年（大正十二年）九月一日、関東大震災により「国民新聞」社屋は、灰燼に帰してしまった。すなわち蘇峰は、「主婦の友」社長の石川武美を副社長として再出発したが、間もなく再建の基礎成って石川が去り、彼の継承者として期待をかけていた二男の徳富萬熊が病死した。次で経営不如意のため、止むなく根津嘉一郎の資本を導入して「国民新

聞」の再生を計ったが、結局資本家根津のために経営権も編集権も根こそぎに取り上げられる結果となり、遂に「焼打」や非難等の人災の奪い得ざりし「国民新聞」<sup>(1)</sup>を天災が原因となつて奪い去つてしまった。さきに、すでに「国民之友」を廃刊し、最後には「国民新聞」にも訣別を余儀なくされたのである。「民友社」はなお一九四八年（昭和二十三年）まで残つたが、流石に彼は最早「水を離れた魚」にも似たる心境にならざるを得なかつた。<sup>(2)</sup>

しかし失意は須臾にして去つた。すなわち大阪毎日新聞と東京日日新聞が、彼を社賓として迎へることとなり、従前以上に大きな執筆の場を獲得したからである。この豪華な記者生活は、一九二九年（昭和四年）四月一日に始めて、一九四五年（昭和二十年）太平洋戦争終息の日に終つた。それは六十七才より八十四才の盛んなる老年期であつた。その間における主たる執筆は『近世日本国民史』であり、その他伝記・政治・評論・小品・書評・随筆・詩歌等々多方面にわたつていた。例えば、木戸・西郷・大久保等の伝記や『維新回転史の一面』『維新回天の偉業に於ける水戸の功績』等々が出版されている。また『日本帝国の一転機』（昭和四年）『現代日本と世界の動き』（昭和六年）『愛国読本』（昭和八年）『昭和国民読本』（昭和十四年）等があつた。それらの諸論策を貫流するもの<sup>(3)</sup>、皇室中心主義であつたことは言うまでもない。

この晩年期に蘇峰は、一九二七年（昭和二年）弟・蘆花と死別し、一九三一年（昭和六年）海軍将校の長男・徳富太多男を喪つてゐる。この時、彼は「予の前途は殆ど此に於て暗胆と言ふ外はなかつた」（『蘇峰自伝』五六一ページ）と叫んだが、「但だ今後剩すところのものは『近世日本国民史』あるのみ。されば予は総ての能力をこれに向つて傾倒し、一切の憂愁を排してこれに全力を注ぐことにした」（同上）と宣言し、修史に専念した。このようにして、彼の余生は、修史等の文筆に終始したのであるが、太平洋戦争への文筆的協力もそれに加わつてゐる。それは外見的には英米撃つべしとする積極性のものに見えたが、元来彼は親英親米の傾向を内在するナショナリストであり、従つて日清・日露の戦役に於けるが如き熱意または信頼感を軍主脳に対して有つことができず、要するにこの時は追隨を余儀なくされたのであつて、知人への書信にもその鬱憤



の一端をもらしているのである。<sup>(4)</sup>

一九四五年（昭和二十年）八月日本は大敗したが、彼は敗戦以後悠悠々自適の「残生を白鷗の友とする」最晩年の生活に入った。すなわち自らを百敗院泡沫頑蘇居士と呼び、静子夫人の永眠（昭和二十三年十一月七日）にさいしては「白雲を呼べど答えず大海の底より湧くはわが涙かも」となげき、「今更に何をか云わむ今さらに何をか云わむただにもだをらむ」と悶えつつ、しかも「よしあしは人に任せて五百年の後のさばきを待つべしわれは」と詠んで、「世が世ならば」の感慨にひたりつつ、「五百年後に俟つ」大自信を持ちつづけたのである。そして『近世日本国民史』第百巻は一九五二年（昭和二十七年）の四月十日に稿了した。すなわち執筆の時から四十八年目ということになる。『勝利者の悲哀』（昭和二十七年）もこの残生の著作である。この頃には又「読売新聞」に多く寄稿し、同志社にも数度来て四十八才で昇天した新島先生礼讃の講演をしている。そうして死の前年、すなわち九十四才のときに、神奈川県二宮の蘇峰堂で、明治天皇と西郷隆盛を平和愛好者なりと説き、板垣退助を武断主義だと断じた平和論を内容とする講演をしたが、この講演が最後の講演になった。すなわち翌一九五七年（昭和三十三年）十一月二日、彼は次の辞世をのこして逝去した。享年九十有五才であった。「吼え狂う波の八重路をのり越えて心静けく港にぞ入る」

蘆花と同様に蘇峰も富士山を愛し、富士山の和歌や漢詩を沢山残している。例えば、和歌には次ぎの如きものがある。「何事も変り果てたる世の中に昔ながらの富士の神山」「大あめつち劈くばかり鳴神の轟く時を楽しぶわれは」「天つ風うづまく雲を吹き払ひあらわし出でよ富士の白雪」。その漢詩の中から一つだけを記してこの稿（第一部）の筆を擱くことにしよう。「日夕雲烟往いて又還る。青霄縹渺たり是れ仙寰。名山は不平の色を作さず。白髪昂然たり天地の間」。

比類なき「大記者」・蘇峰の生涯は富岳に源を発し、濁流をも受容して、本州をくねり流れる変化激しき大河の如くであったということができようか。

(1) 昭和四年一月五日、副社長根津嘉一郎の横暴のために、三年間の不愉快に耐えていた彼は、遂に国民新聞を去るに当って、「……………

不肖自から去らねばならぬ所以は何故である乎。不肖は進んで即今具体的に之を陳述するを屑としない。但だ不肖をして斯く決心せしめたる、重なる理由の一是、筆政の不自由と、不安心の為めである。別言すれば、新聞道の為めに、言論自由を擁護せんが為めである……………」云々という告別の辞を讀者に対して書いた。なお引退にさいしてつくった七言律二首がある。「布衣の宰相涓余春。道うを休めよ千言の筆に神有り」と。今日始めて無職の樂を知る。乾坤落々たり一閑人」は、その一つである。

(2) 「民友社」を手離した彼は、のちに「風雲を捲き起しつる民友社名残は何処訪う人もあらじ」と詠んでいる。

(3) 例えば『昭和國民読本』（昭和十四年）参照。更に『最近の蘇峰先生』（昭和十七年）中の「隨感隨筆」及び「大東亞戦争と蘇峰翁」等参照。蘇峰と東条英機の關係はこの著者附録の相当に詳しい『蘇峰動靜』にも定かでない。

(4) 例えば、鈴木達治宛書翰（昭和十九年八月二十二日）中に次ぎの如き鬱憤を洩らしている。曰く「政治上ニ經綸ナク巨頭ノ文武官ニ闊志薄弱。大氣魄ナク大積極性ナシ。彼等ハ玉碎以外ニハ何モ知ラヌ存セヌノ連中ナリ。コレテスムモノカ慨然」。また昭和二十年十月十五日の書翰には、「……………軍人無腸可恐候」の文句が見出される。

病床の八重樫女史への意外にも全くの戦争臭のない百三十通の書翰にも、ただ東条不信と読まれる文字があり、また中野正剛の自叙に言及した東条政治への静かなる憤慨を示したものがあつて、戦争中の手紙であることを窺知せしめる。その他、後藤是山談によれば、思いきつた東条批判が極く親しい知人に対しては同様になされていた由である。

（附記・この稿の続篇は「著作における蘇峰の政治思想の変遷」として、「同志社法学」に掲載する予定である）